

原著

## 〈ふり〉の特性とその教育哲学的意義

土戸 敏彦<sup>1)</sup>

### Properties of "furi: behaving/pretending" and its educational-philosophical significance

Toshihiko TSUCHIDO<sup>1)</sup>

#### 要 旨

〈ふり〉は元来、単に仕草・動作・様子を意味した。すなわち遂行の意味のみを有したが、いつしか遂行と演技の両面を包括するに至ったと考えられる。

〈ふり〉とは他者の目にさらされている行為であり、演技の意味もそこから派生したのであろう。

とはいえ、遂行と演技の間には境界はなく、連続的な推移があり、しかも〈ふり〉はつねに両義的である。

このような微妙な特性をもっているゆえ、〈ふり〉について伝達し、教えることは極めて困難である。しかし、それゆえにこそ、〈ふり〉という考え方は、ある種の癒し効果をもつ。

キーワード： ふり、遂行、演技、両義性、教育哲学

#### SUMMARY

Japanese word "furi" has double sense: behaving and pretending.

Primitively "furi" meant gesture, motion, attitude and so on, i.e. only behaving, but with the passage of time has come to include both behaving and pretending.

"Furi" is performance exposed to the eyes of other people, whence its sense of pretending (i.e. semblance, imitation and so on) probably derived.

However there is no decided boundary between behaving and pretending, but continuous spectrum. Besides any "furi" always contains double meaning of behaving and pretending.

Because of such subtle properties it is so difficult to deliver and teach "furi" to another. But on the other hand the idea of "furi" can have effect of some healing and salvation.

Key Words : furi, behaving, pretending, double meaning, educational philosophy

---

1) 教育学部こども教育学科 (教育イノベーション機構)

## はじめに

〈ふり〉という言葉、われわれは日常よく使う<sup>1)</sup>。しかしながら、実はそこには一筋縄で捉えきれないユニークな意味が含まれているように思われる。この〈ふり〉の特性とはどのようなものか、そこから教育哲学的にどのような意義が引き出せるか、これを追究することが本稿の課題である<sup>2)</sup>。

その際「教育哲学」とはいかなる学問なのか、それはどのような内容を有し、どんな方法を採用するのか、等の疑問が呈されるかもしれない。「教育哲学」の定義としてはさまざま考えられるが、ここではさしあたりそれを、教育にまつわる諸前提を自明のものとしてせず、その根拠それ自体を問う視点というほどの意味として考えておきたい<sup>3)</sup>。

### 1 〈ふり〉とは元来、単に仕草・動作・様子を意味した

〈ふり〉はもともと、仕草・所作・動作・様子・姿勢・格好などを意味したと考えられる。当然そこには、態度や表情なども含まれよう。要するに、人の行なう身のこなし、立ち居振る舞いを、総じて〈ふり〉と称したのである。

たとえば、「ひとのふり見て、わがふり直せ」という古来の箴言に現われる〈ふり〉は、まさにこの意味で使われている。ここでは、〈ふり〉は人間の所作そのものを名指しているのであって、それ以上でも以下でもない。〈ふり〉は、動作・様子を表わすいわばニュートラルな表現だといってよい。そのかぎりでは、あらゆる所作が〈ふり〉と言えるし、仮にことさらな動作をせず静かに押し黙っていても、それはそれでひとつの〈ふり〉であると言える。

その意味では、人間は四六時中、間断なく〈ふり〉をし続けてきたし、一瞬たりとも〈ふり〉をしないときなどないとさえ言える。しかし、おそらく言葉というものの宿命であろう、そのような〈ふり〉がいつしかそれ自身の意味から溢れ出る。あるいは、

それ自身の意味を溢れ出させる。

〈ふり〉は元来、所作それ自体であって、「する」ものではなかった。自然に、ないし無意識的に振舞いとしてなされるものであったとしても、少なくとも意識的に「する」ものではなかった。ただ、上でもやむなく用いたように「ふりをする」という表現がなされても不思議はない。「仕草をする」「動作をする」という表現がなんら問題にならないように、「ふりをする」という言い方にもいささかの問題もないはずである。

その文脈で「知っているのに知らないふりをする」という表現を考えてみよう。ここに現われている〈ふり〉も、むろん元来はこれまで述べてきたような意味での〈ふり〉であったであろう<sup>4)</sup>。しかし、言葉の歴史的な変遷については不明ではあるものの、このような語法のなかで〈ふり〉という言葉に、ある種の派生的な意味が生まれたのではないだろうか。すなわち、この場合の語法も、元はといえば動作・様子それ自体を表わしていたはずである。実際には知っているのだが、表向きには知らない所作・様子をする、という意味であった。ところが、この〈ふり〉は、我れ知らず元来の所作や様子それ自体のみを指す位置からずれ動き、独特のニュアンスを持ち始める。

というのも、次のようなプロセスが生じたと推察されるからである。すなわち、〈ふり〉はそもそも所作・振舞いそのものであるがゆえに、意識的まして意図的ではなかった。所作は、いわばおのずと、それ自体としてなされていたのである。しかしその〈ふり〉が、〈ふり〉として意識的になされたとすれば、どういうことになるであろうか。そのとき〈ふり〉は、微妙に、しかし根本的に異質な意味を帯び始めるだろう。「知っているのに知らないふりをする」場合の〈ふり〉は、程度はさまざまであれ、自らを意識しているか、ないしある種の意図を含んでいる。この瞬間、元来、所作・様子だけを意味したはずの〈ふり〉が、それとは別の、あるいはそれとは逆の所作・様子を装うという意味を、つまり偽装のニュアンスをもち始めるのである。そして、

ここに潜む意識性・意図性がさらに明確になった場合、〈ふり〉は演技というかたちをとるであろう。そのようなわけで、「知っているのに知らないふりをする」の前段「知っているのに」を省略して、「知らないふりをする」と言っても文意は十分通ずるが、それはこの〈ふり〉がすでに偽装の意味を蔵しているからである<sup>5)</sup>。

以上のようなプロセスを通して、〈ふり〉は偽装あるいは演技の意味を獲得するに至ったと思われる。

ちなみに「父親ぶり」「父親ぶる」「父親のふりをする」の異同を見ておく。「父親ぶり」とは、父親として振舞っているさまをいわば過不足なく表現しているが、「父親ぶる」となると、あえて父親として振舞っているという、振舞いそのものに対するある種のこだわりが感じられる。さらに「父親のふりをする」となれば、父親であることを装う、偽装するという意味さえもつことになる。この場合、彼はむしろ父親でないかもしれないのである。これら三つの例を並べてみるだけで、〈ふり〉の変遷・転位、意味の広がりを見て取ることができよう。

## 2 〈ふり〉は、つねに他者の目にさらされている

所作・様子を表わした〈ふり〉が、偽装・演技のニュアンスをも持つようになる。これは、何に起因するのか。なぜ、〈ふり〉はこのような微妙な様相を呈するのか。それは、いやしくも行為であるかぎり、あらゆる行為は他者の目にさらされているからである。行為者の行為は、つねに他者の前での行為なのである。行為はつねに他者に見られている。社会学者E. ゴッフマンの用語を用いるならば、パフォーマーのパフォーマンスは、オーディエンスの存在を前提するのである<sup>6)</sup>。

ただし、その度合はさまざまである。みずからの行為が他者の目にどう映るか、他者にどのように受け取られるかということ、ことさら気にかけて行為をすることがある。文字通り他者の目にさらされ

た行為である。しかし他方、行為者が他者の存在を意識せずに行為することもある。他者のことを気にかげずに、みずからの行為に集中している状態である。このときといえども、他者の目の存在はゼロではない。他者の目は潜在的につきまとっている。

しかしながら、ここで疑問が出てこよう。というのも、他者の存在しない独りきりの行為というものも当然あるからである。独りきりの行為には、他者の目は注がれていないのか。

生まれたばかりの新生児や、まだコミュニケーション能力が育っていない乳児はおそらく別として、何らかのかたちで対人関係をもちはじめた人間にあっては、現実には他者と対面してはなくても、彼もしくは彼女のなかにすでに対人関係が構成され、いわば内蔵されている。すなわち、ひとたびコミュニケーションに関わりはじめた人間というのは、実は原理的に他者との関係における存在なのである。このことは、一個の人間のなかに他者の目が埋め込まれていることを意味する。自分が見られている、あるいはどう見られているかという意識が、たとえ潜在的にであってもはたらいているのであり、換言すれば、それは自分自身を別の目、他者の目で見える可能性である。人間は誰しも自己に対して、他者の目をも有しているのである。

そうだとすれば、独りきりの行為といえども、みずからの内なる他者がそれを見ていることになる。たとえば、自己を客観的に見るという場合もその一事例であろうし、あるいはフロイト流に言えば内なる規範を司る「超自我」が「自我」に対して統制的に監視し指令するというような場合もあろう。さらにまた世間体を気にする例などにおいては、社会や「世間」が内なる他者として機能するということになろう。いずれにしても、実際の他人が周囲に存在しなくても、あらゆる行為は他者の目にさらされている。そしてまさにそのことを、〈ふり〉という言葉は含意しているのである。

### 3 〈ふり〉は、遂行と演技の両面を包括する

〈ふり〉は今や二つの意味をもつに至る。すなわち、〈ふり〉は、仕草・所作・様子という元の意味と、そして偽装・演技・見せかけという派生的な意味である。

ここで、用語について再考したい。いま〈ふり〉には二つの意味があると述べたが、だとすると、〈ふり〉はある場合にはそのうちの一方の意味をもち、別の場合には他方の意味をもつ、というふうに受け取られる恐れがある。つまり、同時に両方の意味をもちえないと解釈されかねないのである。以下の論述でみるように、この把握のしかたはかならずしも適切ではない。むしろ、〈ふり〉はつねに双方の意味を包み込むと考えたい。そこで、そのような事態を表わすために、〈ふり〉は二つの面をもっていると表現したい。そうすれば、見る角度によって同じ一つのものでそのつど異なった面を見せる、という〈ふり〉の微妙な様相が呈示されるだろう。

さて、一方の面は、仕草・所作・様子等々の面である。動作の主体は、動作それ自体をことさら意識せずに行なっているので、これを「遂行」という語で一括する。そして他方の面は、偽装・演技・見せかけ・模倣等々のそれであるが、他者に見られていることを前提としているので、これらを一括して「演技」という語で表わすこととする。〈ふり〉はこうして、遂行と演技の両面を包括していることになる。この原則をここであらためて銘記しておきたい。

なぜ、このようなことをあえて述べるかと言うと、われわれの日常の言語使用においては、〈ふり〉の語は遂行の面よりも、はるかに濃厚に演技の意味合いを帯びざるをえないからである。その理由はおそらく、すでに触れたように、「ふりをする」という言い回しにおいて〈ふり〉が、他者の目にさらされつつ、意識的・意図的になされる文脈で用いられることが一般的であるためだろうと推測される。

そのことは、たとえば「酔ったふりをする」「仲のよいふりをする」などの馴染みある表現に顕著に

表われている。「酔ったふりをする」とは、詳しく言えば「酔っていないのに酔っているふりをする」ということであるが、実態と異なる振舞いをするという意味でこの〈ふり〉はまさに演技にほかならない。「ふりをする」という表現のほとんどすべてにおいて、この演技の意味合いが支配している。

ちなみに、「死んだふりをする」という例を考えてみよう。まぎれもなくこの例は演技である。死んではいないが死んだまねをしているということである。ただし「死んではいない(生きている)」という遂行面と「死んでいる」という演技面が、ここでは乖離している。けれども、遂行と演技が支え合っているという構造は確認できよう。また、上に挙げた例「知っているのに知らないふりをする」の逆の場合として、「知らないのに知っているふりをする」ということもありうる。いわゆる「知ったかぶり」である。要するに演技はそれを支える遂行があるから可能であり、遂行の方もつねに演技への展開可能性を秘めたものとしての遂行である。その意味で、遂行と演技は相互に依存し合っている。

ここから「死んでいない(生きている)ふりをする」という演技が不可能であることも理解できよう。この演技は、それを支える遂行の面が不在であり、相互依存が成立しないのである。「ふりをする」とは、遂行と演技の両契機が必要なのである。

### 4 〈ふり〉における遂行と演技の間に明確な境界はない

〈ふり〉および「ふりをする」ことは、遂行および演技という二つの契機から成り立っている。ゴッフマンは「パフォーマンス」という用語で同様の事態を表現している。パフォーマンスにおいては、「一方の極に、パフォーマーが自分自身の行為にすっかりとらわれ欺かれてしまっている、すなわち、彼は生真面目に(sincerely)、彼が舞台にのせたリアリティを現実そのものだ、と信じ込んでいる場合がある。……他方の極に、パフォーマーが自分自身のルーティーンに全然欺かれない場合がある。……当人が

自分自身の行為に信をおかずに相手の信頼にもなんらの関心を示さないとき、われわれは彼を醒めている (cynical) という……<sup>7)</sup>」。

わかりやすく言い直せば、前者の「生真面目」なあり方とは、行為者がいわば行為そのものになりきり、行為それ自体に集中・没頭している状態であり、後者の「醒めた」あり方とは、行為者がいわば自身の行為から距離をとり、みずからの行為を意識し、場合によって客観視している状態である。

ゴッフマンがパフォーマンスについて述べているように、〈ふり〉にも遂行と演技の両極がある。遂行の極においては、〈ふり〉はいわば脇目もふらず、ひたすら行為そのものへの没頭を意味する。言い方を換えれば、装い繕うところがまったくない状態である。特段の行為をするのでないような場合、つまりたとえ無為であっても、同様である。このときの無為は無為そのものであって、そこには演技性がな

い。しかし、逆の〈演技〉の極にあってはどうか。行為は演じられたものである。装われている。あるいは、取り繕われている。その極致は、偽りや欺きでさえあるだろう。ここでは、行為者の意図と見かけが相反したものとなっている。この二つの極をもった〈ふり〉をどのように考えるべきか。

両極の特徴を見るかぎり両者は正反対の様相を呈しており、遂行と演技という二つの契機は相容れそうにない。しかし、この二つの契機は判然と区別されうるだろうか。

たとえば、政治家の演説は真剣におのれの信念を訴えているようであり、その実、選挙向けの綺麗事のようなものである。あるいは、商品のよさをアピールする売り子の口上、保険外交員の親身に相談に乗る態度等々、このような語りや行為のどこまでが遂行で、どこからか演技か区別がつかだろうか。その区別は、実は本人にもできないだろう。

そして肝要なのは、同様のことはわれわれの日常の発言や行為にも当てはまるという点である。われわれの日々何気なく行なっている行為には、遂行と演技の双方の要素が含まれており、両者の間にはつ

きりした境界など存在しないのだ。

要するに、「ふりをする」とは、一方の「生真面目」すなわち、いわば行為そのものになりきったあり方と、他方の「醒めたあり方」すなわち自身の行為から距離をとったあり方の、双方を（両者の割合のバランスはどうあれ）含んだ行為なのである。たしかにそれぞれの極に近づけば、遂行と演技の区別はしやすくなるだろうが、しかし両者の間には実は曖昧なかたちで入り混じり、あえて言えば連続的スペクトラムないしグラデーションをなしているのだろう。それは、演技を含まない純粋な遂行のみの行為や、逆に遂行の契機を排除した純粋な演技のみで成り立っている行為が存在しないことを意味する。すなわち、二つの契機のいずれが優勢であるかはともかく、〈ふり〉には両者のいずれもが含まれているのである。

## 5 〈ふり〉はつねに両義的である

わが日本語には、古くから建前と本音という言葉が存在する。この二つの言葉はもともと別個に成り立ったものであるが、いつしか対照的に用いられるようになった。その際、当初の原義から微妙な意味変化を蒙ったと思われる。たとえば建前とは、もともと家屋の建築のさい棟木などの主要部を組み上げることを意味したのだが、「本心から出た言葉」である本音と対照されることによってことさら「表向き」の部分がクローズ・アップされることとなった。あるいは、建前が「表向き」の意味を含んでいたがゆえに、結果的に本音に対して対照的な語とされたのかもしれない。いずれにしても両者が対照化されることによって、建前は「表向きの原則」を、本音の方は、表向きの原則の裏にある「本心」を意味することとなった。このように語義の変化を蒙った両者ゆえに、その点に着目する意味で、以下、タテマエとホンネというように表記する。

ところで、これまで述べてきた〈ふり〉における遂行と演技は、一見このタテマエとホンネに対応するように思われる。すなわち、演技がタテマエに相

当し、遂行がホンネに当たるといふようにである。少なくとも類似のものと見なされても不思議はない。というのも、タテマエが「表向きの原則」、ホンネがその内奥にある「本心」だとすれば、たとえば役者の演技それ自体は「表向き」のものであって、役者自身の遂行としての内心は「演じている」ことを意識した別物だといふふうに見なされるからである。演技はまさに他者に見せる行為、遂行は自分自身にとっての行為として別個に捉えられ、演技と遂行はタテマエとホンネのようにいわゆる二項対立の様相を呈してくる。

しかし実は、ここで言う遂行と演技は、ホンネとタテマエのような二項対立をなしてはいない。ホンネとタテマエは、上で見たように本来、対立するものなどではなかったが、あえて対照させられることによって二項対立の典型となるに至った。ちなみに、ホンネとタテマエに類する二項対立としては、実体と仮象、実像と虚像、正体と見かけ、本心とうわべ、中身と外見、などが挙げられよう。

ところが、これに対し〈ふり〉における遂行と演技は、すでに述べたように両者の間に明確な境界などなく、いわば相互に浸透しているか、もしくは相互に汚染し合っている。〈ふり〉は遂行と演技を同時に含んでおり、遂行でもあり演技でもあるという両義的な性格をもつのである。

例を一つ挙げてみよう。たとえば、歩行者信号が赤を示している。にもかかわらず眼前の自動車道を走るクルマはほとんどない。このとき（もちろん、道路幅や交通状況、他者の存在等の事情にもよるが）歩行者には信号を無視して車道を渡るか、それとも信号を守って立ち止まっているか、微かな葛藤が生じる。そして、渡るにせよ止まるにせよ、この歩行者においては、他人の目など関係なくその行為をやり遂げることに集中する態度と、他人の目を意識しつつ、他人にどう映るかを気にしながら行為する態度という両面が同時に存在している。両者がいわば共存しているのである（もちろん、人によって両者のバランスはさまざまだろうが）。このように何か行為をするとき、とりわけ他者に見られている

場合、行為者の行為は、一方で一定の目的を求めて遂行しようという面をもちつつ、同時に他方でそれ自体が演技として表出されるという面がつねにある。一言でいえば、〈ふり〉は両義的なのだ。

## 6 「ふりをする」ことを教えるのはむずかしい

以上のような両義性を有する〈ふり〉について、さらには「ふりをする」ことについて、これを誤解されることなく他者に伝えることはむずかしい。まして教えることはきわめて困難である<sup>8)</sup>。

その主要な理由は、日本語の一般的な用法では、〈ふり〉は偽装ないし演技の意味合いを濃厚に帯びざるをえないからである。その際には、くだんの両義性は失われがちになる。事実「ふりをする」という言い回しで、演技の意味を帯びていない用法を見出すことは容易ではない。しかし、あえて〈ふり〉に両義性をもたせて表現してみてもどうか。

道徳的とされる行為から例を一つ挙げてみよう。たとえば、車内で高齢者に席を譲るような行為などであるが、そこにはほとんどの場合、他人の目など関係なくその行為をやり遂げることに集中する態度と、他人の目を意識しつつ、他人にどう映るかを気かけながら行為する態度という両面が同時に存在する。この両義性を含んだ意味で〈ふり〉という語を用いるなら、この行為を、席を譲る〈ふり〉と呼べるはずである。こうすればこの種の行為に含まれる微妙なニュアンスを窺い知ることができるが、席を譲る場合にかぎらず、おしなべてわれわれの行為は実はそのようにして成り立っているとも言える。

だとすれば、〈ふり〉を演技や偽装の意味に限定すべきではない。すなわち、〈ふり〉という語に両義性をもたせて捉えるべきではないか。今や、〈ふり〉に両義性があることをあらためて認識することが重要な意味をもつように思われてくる。

そのように考えれば、たとえば教師の「ふりをする」とは、この用法に従うかぎり「教師然とする」

ということでもある。「学生らしく振舞え」とはまさに学生の「ふりをする」ように促すことでもある。そこには、タテマエとホンネ等の背反した二重性ではない、日常の実相がある。その意味で「ふりをする」ことは、想像以上に幅広い包容性をもつはずであり、道徳教育を含めて一般の教育に対しても深い射程と可能性をもつと思われる。

ただし繰り返せば、一般の語法では〈ふり〉とは演技・偽装の意味を色濃くもつ以上、誤解されて受け取られる恐れは十分にある。だからこそ、「ふりをする」ことを教えるのはむずかしいのである。

## 7 〈ふり〉という考え方は、ある種の癒し効果をもつ

〈ふり〉が両義的だということは、そこにある種の曖昧さらしきものが漂っていることを意味する。しかし、そのことがかえってポジティブな効果をもつということもありうる。

一般に、われわれの生活や人生における事がらがかならずしも白か黒かの決着がつくものではないことは、経験的によく知られているところである。たとえば人間は善人か悪人かのどちらかに分けられるものではないことは、誰も認めるはずである。では、一定の行為ならばどうか。道徳的行為とは善なる行為だとされるが、そのような行為であってもかならずしも善なる行為と断定しがたいケースは珍しくない。現実において純粋に善から成り立つ行為、あるいは純粋に悪である行為というものがあるだろうか。

われわれの住む世界では二項対立風に考える慣習が根強くある。日常的にもそうであるし、学問の世界においてもまた然りである。道徳についていえば、善か悪かということであろうが、これは道徳にかぎらない。ある物事について、価値があるか、無価値かという区別もあるだろう。美か醜かという区分法も広く蔓延している。優れているか、劣っているか、という二分法は、学校教育ではおなじみのものである（もちろん、これらそれぞれにいくつかの段階が

設けられるにしても、である）。

このような二項対立的な発想に、われわれは必要以上にとらわれてはいないだろうか。もっと言えば、そのような発想に知らずしらず侵されてはいないだろうか。そしてそのことが、われわれを息苦しくさせてはいないだろうか。

「あらゆる行為は遂行性ととも演技性をも含んでいる」という考え方は、その理解の仕方を広げるならば、人間存在の問題、人生の問題、他者との関係の問題等に苦しむ者ないし躓く者にとって〈救い〉ないし〈癒し〉の効果をもつ場合があると思われる。

たとえば――

「人間はすべからく価値ある存在でなければならない」

「いやしくも人生には何らかの意味がなければならない」

「道徳的行為は、動機が純粋であり、定言命法的でなければならない」

「他人に対しては、心の底からつねに誠実でなければならない」

などの規範（これらは、世のモラルや社会通念のタテマエに潜んでいる）は、ときに重圧となりうるが、それらに対して「ふりをする」ことはその呪縛を解く可能性をもつのである。

平たく言えば、世の中は〈ふり〉で成り立っているのだが、その〈ふり〉が大事なのだ。もちろん、かと言って、曖昧で粗雑な行為が称揚されているわけでは、まったくくない。いわんや、偽りの演技をすべく促されているのでも断じてない。「ふりをする」ことは他人の目をごまかすことでは決してない。それは、行為が社会のなかで柔軟に円滑になされることを意味しているのであり、〈ふり〉が言わんとするところは、人がまっとうに生きる術なのである。

注

- 1) 〈ふり〉というように、あえて特別な括弧書きにする理由を述べておく。まず、ふりというふうに括弧を付けずに書けば、いわゆる地の文のなかに埋もれてしまい、いま注目している語だ

というニュアンスが削がれてしまう恐れがある。「」を付けてもよいが、後でも再三出てくるように、引用文や例文のなかでも現われるので、その際はいちいち『』にしなければならなくなり煩わしい。さらに、それ以上の理由として、この語に独特の意義と可能性が存在することを示す意味で、〈〉を付すこととした。ただし、「ふりをする」については、このままの表記としている。

- 2) 本稿は、「ふりをする」ことの伝授と教育的意味についての問題提起(土戸 [2009])に基づいて、「〈ふり〉に関する7つのテーゼ」としてその後報告した覚え書(宮川ほか [2013]、62-63頁)を敷衍し、あらためて〈ふり〉について追究しようとしたものである。
- 3) 「教育哲学」のいくつかの考え方については、土戸 [1999]、2-19頁、参照。
- 4) 『大辞林』(松村編 [2006])の説明はこのことを肯定しているように受け取れるが、『広辞苑』(新村編 [2008])は「人のふり見てわがふり直せ」と「知らぬふりをする」とを別項で扱っている。
- 5) 「知らぬ顔をする」という表現は、「知らぬふりをする」とほとんど等価である。このかぎりでは、〈顔〉にも〈ふり〉に似たところがある。とはいえ、単独では〈顔〉は〈ふり〉ほどの意味をもちえない。〈顔〉は、〈ふり〉とは微妙に異なっており、拠点が「素顔」に残ったままであり、語法の面で「いつもの顔」への転位がさほど起きていないと考えられるからである。鷺田 [1998]、45-59頁、参照。
- 6) オーディエンス (audience) とは聴衆・観客という意味であるが、ゴッフマンは、パフォーマンスをつねに舞台装置 (setting) の上で展開されるものとして考えており、ここで言う他者は彼のいわゆるオーディエンスに相当する。ゴッフマン [1974]、18、25頁、参照。
- 7) ゴッフマンのいうルーティーンとは、「あるパフォーマンスの間に開示され、別の機会にも呈

示されたり、演じられたりする既成の行為の形式」であり、「役目 (part)」とも言い換えられる。ゴッフマン [1974]、20頁。Goffman [1959]、pp.17-18.

- 8) 教えることがむずかしいのは、道徳も同様である。そもそも道徳を教えること自体がむずかしいが、まして教育現場でそれを「評価」することなどできようもない。というのも、ある行為について、それが真に道徳的な動機にもとづく行為なのか、それとも見かけにすぎないかなどという(本人にもできない)区別を客観的にすることは不可能だからである。それはホンネとタマエではなく、〈ふり〉なのである。土戸 [2013]、参照。

#### 参考文献

- Goffman, Erving 1959 *Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Double Day Anchor Books
- ゴッフマン, E. (石黒毅訳) 1974 『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房
- 松村明編 2006 『大辞林 第三版』三省堂
- 宮川幸奈・土戸敏彦・山岸賢一郎・岡野亜希子・京極重智・藤田雄飛 2013 「〈ふり〉の教育哲学 1.5——九州教育学会ラウンドテーブル報告と今後の展望——」、『教育基礎学研究』第11号(九州大学教育基礎学研究会)、61-75頁
- 新村出編 2008 『広辞苑 第六版』岩波書店
- 土戸敏彦 1999 『冒険する教育哲学——〈子ども〉と〈大人〉のあいだ』勁草書房
- 土戸敏彦 2009 『「ふりをする」ことの伝授としての教育』、『九州大学大学院教育学研究紀要』第11号、99-109頁
- 土戸敏彦 2013 「道徳は評価できるのか——道徳における〈ふり〉をめぐる」、『教育と医学』No.724、2013年10月号、60-67頁
- 鷺田清一 1998 『顔の現象学』講談社学術文庫